

ARTICLE

「こどものチカラ」が地域を変える！

—高知市、名取市、茅ヶ崎市・寒川町の成果をふまえて、『こどもファンド』を提案する—

早稲田大学社会科学総合学院教授 卯月盛夫

1 はじめに

第10期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理（2020年9月）において、「子供・若者の地域・社会への主体的な参画と多世代交流の推進」が提起され、「子供・若者が地域の課題解決に主体的に関わることは、主権者意識の涵養に資するものであり、より良い社会をつくっていく資質・能力を育む上で重要。社会教育・学校教育という区分を超えて充実を図るべき」と説明されている。

そこで本稿では、こどもが地域づくりの活動企画の申請を行い、それを同世代のこどもが審査し、採択されるとその提案内容に予算がつき、こどもがその活動を実践する仕組み「こどもフ

ンド」を紹介する。具体的には、私がかれまでお手伝いしてきた高知市、名取市、茅ヶ崎市・寒川町の3事例を通じて、こどもと若者の主体的な地域参画について考えてみたい。

2 こどもファンドの基本的枠組み

2-1 こどもの活動企画

年齢としては18歳までのこどもたちが、学校のクラスや児童会・生徒会、あるいは地域のこども会、さらにこどもの自主的な集まり等を通じて3人以上のグループをつくり、どこでどのような活動をしたいか、またどのような地域にしたいか等の1年の活動企画と予算計画をまとめ、提案する。予算作成に関しては大人のサポートが必要な

ため、2人以上の大人サポーターも同時に申請する。

学校を単位とする場合は、応募するこどもはほぼ同年齢だが、地域を単位とする場合は、未就学児から小学生、中学生、高校生にまたがる場合もある。いずれの場合も、こどもならではの発想やアイデア、主体性が重要で、公開審査会に先立ち、こども審査員による書類の事前審査もあるため、申請書の内容はできるだけわかりやすい表現が求められる。申請内容もパソコンではなく手書き、あるいはイラスト付きもこども審査員には好評である。もちろん、グループ名称や活動テーマの名称も、こども目線が重要だ。

2-2 こども審査員



卯月 盛夫
(うづき もりお)
早稲田大学建築学科、同大学院修士課程修了後、ドイツのシュトゥットガルト大学大学院博士課程留学、ハノー

バー市・シュトゥットガルト市都市計画局勤務後、トリープ教授主宰の都市デザインアトリエ勤務、帰国後、世田谷区都市デザイン室主任研究員、世田谷まちづくりセンター所長、1995年4月より早稲田大学教授、早稲田大学「参加のデザイン研究所」所長、博士（工学）、一級建築士。

こどもファンドの最大の特徴は、こどもの提案をこどもが審査する点である。これまでも、こどもによる地域づくり活動企画に助成する仕組みはあったが、その審査をするのは大人だけだった。しかしこれまでの経験から、大人が評価する視点とこどもが評価する視点は微妙に異なることが多く、大人だけの審査には限界があったと考えている。

こども審査員も基本的に公募である。地域で活動をしたいこどももいるが、それを審査したいこどもも結構いる。当初は公募ではなかなか集まらなかったため大人からの声かけが必要であるが、2〜3年経過するとこども同士の口コミで集まるものである。小学生3人、中学生3人、高校生3人の合計9人程度を基本にしたが、応募は各年のため、その状況により7〜11人程度で実施されている。1年で辞めるこどももいるが、数年行うこどもも多く、高知では小、中、高と最長8年間こども審査員を務めたこどもも2人いる。また、これまでの最年少は小学生3年生だが、高校生と一緒に議論することには全く問題はない。兄弟姉妹で相談し

ている感覚である。

こども審査員には、公開審査会の2〜3週間前にすべての応募グループの活動企画申請書が自宅に郵送されるため、申請書を読み込んでおく必要がある。公開審査会1週間前の事前審査会では、当該年度のこども審査員が初顔合わせをするため自己紹介やコミュニケーションセッションゲームを経て、申請書の内容でわかりにくい点を事務局や大人審査員（名称は審査員だが投票権はなく、あくまでもこどもが審査するにあたり



写真1 審査基準をつくるこども審査員の議論（こうちこどもファンド）

表1 審査基準（なとりこどもファンド、2022年度）

①	地域のことを考え、地域のひとたちに喜ばれる内容か？
②	名取らしい内容か？
③	こどもたちの自主性、主体性があるか？
④	継続性があるか？
⑤	新型コロナウイルス対策ができているか？

なとりこどもファンドの審査基準を表1に示すが、「名取らしい内容か?」、「新型コロナ対策ができていますか?」は、前年2021年に新しいこども審査員からの提案で加わった内容が再度採用された。

2-3 公開審査会

公開審査会は、こどもファンド事業のメインイベントである。こどもファンド

て、サポートやアドバイスをする役割。当初こどもだけで助成金の審査の決定するのは好ましくないという行政判断から、このような名称となった経緯がある）に確認をして、全員で共有化を図る。さらに、公開審査会に向けて4〜5の審査基準を決めるための議論を行う（写真1）。もちろん審査基準は毎年大きく変わるものではないが、前年までの審査基準を参考にしながら、当該年度のこども審査員が改めて決定することが重要である。2022年度の

事業は原則単年度であるため、4月活動企画公募、5月締め切り、6月公開審査会が一般的である。もちろん発展する形での継続申請は可能である。したがって実際の活動は7月から次年度の2月頃までの8ヶ月程度である。そして3月には活動発表会があり、活動成果に対して会場での投票によって楽しい賞が与えられる。

公開審査会当日のプログラムは、申請グループのプレゼンテーション（1団体3～5分）とこども審査員からの質問（1団体3～5分）の後、こども審査員は各団体に対して第一次判断（助成したい、もう少し議論したい、助成は難しい、のいずれかの評価をする）を一覧表にシールを貼る形で行う。シールには、こども審査員の名前が書いてある。休憩後、「もう少し議論したい」と「助成は難しい」と評価されたグループを中心に、その評価をしたこども審査員に再度の質問や意見を発言してもらい議論をする。そして必要に応じて大人審査員（前述）のアドバイスや意見も聞いていく。議論の時間は、応募グループ数にもよるがおよそ30～50分程度を要する。応募団体は、通常8～

12団体程度であるため、公開審査会全体としては午後の時間帯すべてを費やすことになる。ただ、議論の過程では結構厳しい意見も噴出する。こども審査員の質問に対してきちんと回答できないと、最終的には選に漏れるケースもある。

公開審査会是一般市民にも公開されるため、会場には応募した学校や地域の大人サポーター、ファンドの寄付者、地域づくりの関係者が多く参加し、活動するこどもとこども審査員の真剣な質疑応答のやり取りを聞き、新鮮なこ



写真2 公開審査会の様子（ちがさき・さむかわこどもファンド）

どもの考え方を学ぶことができる。（写真2）

2-4 大人のサポート

こどもファンドがきちんと機能するために、様々な大人のサポートが必要となる。「大人サポーター」は、こどもの活動企画の申請書作成の段階から、最終報告をまとめるまで支援をするが、学校の教員や地域団体、活動することも両親が担うことが多い。ただ活動の支援にあたっては、より専門的なアドバイスも必要のため、グループの希望がある場合、企画の段階から実施の段階まで含めて、地域づくりの専門家「こどもファンドアドバイザー」が事務局の費用負担で派遣される。参考にするべき事例の紹介や協力団体の紹介等を含めて、より魅力的な地域づくり活動を実践するためには重要な仕組みである。また、こども審査員が小学生の場合、事前審査会や公開審査会の流れを理解するために、こども審査員の協で逐次補助的に説明をする「こども審査員アドバイザー」という役割もある。

さらに前述した「大人審査員」の3～5人は、公開審査会において、申請したこどもとこども審査員との質疑応

答と議論をスムーズに行うために役割がある。教育や市民活動に関するNPOや市民団体、企業代表、研究者さらに行政からは教育長やこども施策担当部長が入るケースもある。公開審査会の質疑応答と議論の進行は、「大人審査委員長」が務めることが多い。このように、こどもファンドを支える大人のサポートは極めて重要である。

2-5 助成金の財源

こどもファンドの助成金の財源は主催者によって異なる。こうちこどもファンドの事務局は高知市地域協働部地域コミュニティ推進課、なとりこどもファンドの事務局は名取市企画部市民協働課で、両市共にこどもや若者だけでなく市民全体の参加や協働を担っている組織である。事務局が行政の場合、条例基金をつくり基金から助成金等の支出を行っている。ただ注目すべきは、この基金に民間企業・市民からの寄付金が極めて多い点である。たとえばこうちこどもファンドは2012年度に市の2,000万円の積立でスタートし、その後毎年積立金を増額させてきた。そして、こどもたちへの活動助成金はこの11年間（2020年は

新型コロナウイルス拡大のためファンド事業はなかったため、実質的には10回）で、延べ78件に対して1,272万円、1件あたりの平均助成金16・3万円となっている。ただこの11年間の寄付金総額がおよそ1,340万円（企業が延べ154社、個人が延べ51件）もあつたため、こどもたちの助成金はすべて寄付金で賄われたと解釈することもできる。

名取市では2019年に1,018万円、2020年に1,018万円で基金を創設し、2021年までの3年間で延べ32件に対して総額272万円、1件あたりの平均助成金8・5万円を助成している。この3年間の寄付金が307万円あり、名取市でもこどもたちへの助成金総額を超えている。つまり、両市共に税金によって条例基金を設定したが、数字だけを見れば、これまでは寄付金だけで助成金を賄っていることになる。こどもファンドは、地元企業と市民の大きな期待と財政的支援によって運営されていることがある。

一方2022年にスタートしたちがさき・さむかわこどもファンドは、特定非営利活動法人NPOサポート茅ヶ崎（茅ヶ崎市民活動サポートセンター

の運営を茅ヶ崎市から受託している市民団体）が主催をして、独自の予算で実施している。もちろん、企業と個人の寄付も募っている。市民セクターの運営のため、高知市と名取市のような行政運営と比較すると、すべてにわたってかたい雰囲気はなく、こどもフレンドリーである。全体の流れについては大きな違いはないが、助成金の上限は異なっている。高知市は20万円、名取市は10万円、茅ヶ崎市・寒川町は5万円であるが、私の経験から、この上限によるこどもの活動内容にほとんど差は感じられない。

3 具体的なこどもたちの活動

3-1 こうちこどもファンド

こどもたちの活動は全体を見ると極めて多岐にわたっているが、個別に見るとかなり各地区の個性によるものも多い。参考に、2022年度に採択されたこどもたちの活動内容を表2に示す。高知の特徴は、南海トラフ地震に対する防災活動が多いことである。もちろん学校や地域でも防災活動は実施されているが、こどものアイデアによる学校と地域が一体となった取り組み



写真3 お年寄りと避難訓練



写真4 シャッターの落書き消し



写真5 料理教室の開催

表2 2022年度こうちこどもファンド活動グループ

グループ名	分類	活動テーマ
未来を変え隊	中学生	川のゴミを見える化大作戦 ～みんなで知ろう ゴミについて～
Mteens	高校生	マンネリから脱却！高校生中心の防災
Different	高校生	地域とのかかわり×防災
旭っ子記者クラブ	小学生 中学生 高校生	旭小学校区の過去～現在を知って未来を考える
土佐女子おれんじflowers	高校生	アップサイクル×生理の貧困解決の手助けでもっと暮らしやすく！
Team Petrio	中学生	～ペットに楽しい安全な未来を～
久重naturalチーム	小学生 中学生 高校生	久重の里山の魅力再発見プロジェクト！① ～SDGsで持続可能なまちづくり～

はファンドにふさわしい(写真3)。またシャッターや壁の落書き消し活動や川の清掃活動も多く、醜いものを除去しようというこどもたちの思いも強い(写真4)。さらに地元の食材を使ったかつてのレシピの復活や防災食の開発、さらに遊休農地の活用による高齢者との交流等、食は人と人を繋げる役割を果たしている(写真5)。2021年には、女子校の高校生から生理の貧困をテーマとする活動の応募があり、成果としてYouTubeの作成をしたことから、地元のマスコミはもちろん、全国放送のラジオ局にもインタビューが流れ、脚光を浴び、2022年も継続活動をしている。また、保護犬・保護猫の活動が新規に加わった。

表3 2022年度なとりこどもファンド活動グループ

グループ名	分類	活動テーマ
名取北高校 生徒会執行部	高校生	雷神山古墳紙芝居で広報隊
Term名取一番	高校生	全国1位で名取をアピール
増田子ども遊びクラブ	小学生	増田のいいところ屋台
名取北高校 奉仕活動部	高校生	名取フラワーアート ～笑顔の花とともに～
チームごみゼロプロジェクト	小学生	ごみゼロプロジェクト
JKの知恵袋2	高校生	防災食プロジェクト2
名取北高校 吹奏楽部	高校生	コロナに負けるな！～名取市つながるプロジェクト～
農業経営者クラブ New Breadの商品開発	高校生	天然酵母パンを名取から世界へ
下増田児童センター子ども実行委員会	小学生 中学生	児童センターゲーム大会
農業経営者クラブ Team#Zeroマイプラ	高校生	#Zeroマイプラ

312なとりこどもファンド
2022年なとりこどもファンドに採択された内容を表3に示す。名取の特徴は、市内にある宮城県立農業高校が5年間継続して(行政の条例基金に



写真7 コロナでも子どもが遊べるようにと制作された大判カルタ



写真6 名取の名産であるメロンを使ったパンとスイーツ

後が楽しみである。

また小学生の応募が多かったことも今後が楽しみである。

先立ち、民間基金によるファンドの段階から含めて、毎年2〜3件の活動企画を実施していることである。農業経営者クラブというサークル活動の一環ではあるが、東日本大震災で大きく被災をした名取市において、たとえば一頭生き残った牛の牛乳を利用した商品の開発や、小学生と共に開発したおにぎりを地元のコンビニで販売したり、全国に発信できる名取の名産品の開発をする等、地産地消のさまざまなアイデアを実現、商品化している(写真6)。

またコロナ禍の中で、大判のカルタを作成して体育館でカルタ大会を企画した高校生(写真7)、花火大会が中心になったため、小規模な花火大会を校庭で企画した子どもたちもいた。

3・3ちがさき・さむかわこどもファンド

2022年に採択された活動内容を表4に示す。NPO法人による運営で、初年度にもかかわらず9件の応募があり、そのすべてが採択された。特徴としては、茅ヶ崎の海にちなんだ清掃活動やSDGsに関係した活動が多く、また小学生の応募が多かったことも今後が楽しみである。

表4 2022年度ちがさき・さむかわこどもファンド活動グループ

グループ名	分類	活動テーマ
なくそう交通事故チーム	小学生	ガードレールすきまが危ない!
チーム6-1	小学生	海の輝きを取りもどせ! 6-1ベンチDIYプロジェクト
海を守ろうプロジェクト	小学生	海のゴミでやくだつものを作るワークショップ
未来へつなげ隊	小学生	寒川茅ヶ崎垢抜け計画 ~未来へつなぐ~
音楽で元気届け隊	小学生	みなさんに音楽を出前!
美しい茅ヶ崎を目指してプロジェクトC	小学生	サザンビーチを美しく
茅ヶ崎しぜんたい	小学生	山やしぜんをたいせつにしようプロジェクト
メダカシスターズ	小学生	メダカからのSOS ~未来につなぐ命~
ShoNanスマイリー	小学生	~FNP~ (ふるさと納税プロジェクト)

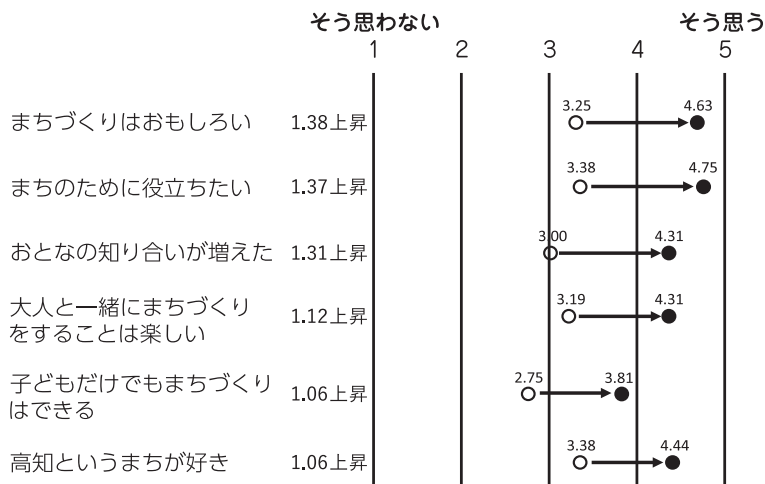
4 子どもの成長

こうちこどもファンドが設立から10年を迎えた2022年に、これまで活動をしたこどもたちにアンケート調査を行った。詳細な結果は、2023年3月に報告書をまとめるため、今回はその一部を紹介する。

ファンドの助成を受けて活動したこ

どもたち76人(学校単位の活動43人、地域単位の活動33人)に、まず「活動をしてよかったか」の設問に対して、76人全員が「はい」と回答している。また、いくつかの設問に対して活動する前後の意識変化を数字で回答してもらった。「1. そう思わない、2、3、4、5. そう思う」という5段階評価で前後を比較すると、「大人の知り合いが増えた」に対しては2・55から3・85へ1・30ポイントアップ(地域)、「大人と一緒にまちづくりをすることは楽しい」に対しては2・91から3・91へ1・00ポイントアップ(地域)、「まちづくりはおもしろい」に対しては2・94から3・88へ0・94ポイントアップ(地域)など、11の設問すべてにわたって、成長の自己評価をしている。こどもの活動をサポートしている学校関係者によるこどもたちへの評価(複数回答)としては「まちのために役立ちたいと思うようになったと思う」(76%)との指摘が多く、また地域の大人サポーターによる評価は「大人の知り合いが活動前より増えたと思う」(63%)との指摘が多く、こどもたち自らの評価も大人の評価も極めて肯定的である。

表5 こども審査員の活動前後の意識変化(こうちこどもファンド)



また、こども審査員経験者に対しても同様の設問をした(2020年、回答数16人)が、活動前後の意識の変化は極めて大きい(表5)。特に「まちづくりはおもしろい」、「まちのために役立ちたい」という設問に対しては、活動前は「普通」(3・25、3・38)だったこどもが活動後には「そう思う」(4・63、4・75)に変化し、1・38お

よび1・37アップしたことは注目できる。こども審査員の中には、小学生から高校生になるまで8年間経験したこどもが2人、7年間経験したこどもが2人いて、長期的な審査員活動による変化、成長が大きいと考えられる。個別ヒアリングにおいても「高知が大好き!」、「高知を全国に宣伝したい!」、「高知のために働きたい!」という強い地域アイデンティティを有していることがわかった。さらに大学で勉強していることとして「地域づくり」と回答しているこどもたちも数名いる。こども審査員の両親に対するアンケート(複数回答)でも、「問題意識を持って行動・発言ができるようになった」(70・0%)、「自発的に行動ができるようになった」(62・5%)という、こどもの自発性や主体性を評価するものが多かった。わずか10年とはいえ、高知のこどもたちの成長を確認することができる。

5 地域と大人の変化

こうちこどもファンドのこどもの活動を支援する学校関係者50人と地域の大人サポーター(家族を含む)33人、合計83人からアンケートの回答を得た。

まず、「こどもといっしょに活動をしてよかったか」に対しては、全員が「はい」と回答している。地域と大人の変化に関する設問（複数回答）では、「こどもといっしょに考える機運が高まった」（学校／48%、地域／70%）、「これまで知らなかった方と知り合いになった」（学校／42%、地域／65%）、「地域の人が気軽に声をかけてくれるようになった」（学校／48%、地域／63%）、「地域の催しに参加してほしいという声掛けが増えた」（学校／50%、地域／45%）という回答から、こどもの活動を支援する大人とこどもの関係性が次第に強くなり、こどもの活動をきっかけにして、ゆつくりではあるが地域の大人たちがつながりはじめていることがわかった。

また特定の地区ではあるが、地域の大人がこどもの活動を数年間支援する間に、こどもたちとの関係が強くなり、大人の会議体である地域のまちづくり協議会にこどもたちも参加するようになった。現在こどもたちは協議会の正式なメンバーとなり、さらに中学生はファシリテーターの役割も担っているということである。多世代交流を超え

て、多世代コミュニティを構築しようとしている素晴らしい事例である。

6 おわりに

日本における「こどもファンド」は、高知で10年、名取で5年（当初の2年は民間基金、その後の3年は市の条例基金による運営）、茅ヶ崎・寒川ではわずか1年しか経験していない。しかし、筆者がこの3地域ですべての公開審査会と活動発表会に参加してきて感じるのは、「こどもの成長」と「地域の変化」である。当初は、こどもがこのような地域づくりの活動の経験をしたからといって、こどもの成長は長い時間がかかるし、地域もそう簡単には変わらない、と考えていた。しかし今では、ちよつとした小さな体験や貴重な出会いによって、こどもは大きく変わると思うようになった。地域における自然の魅力や大人のやさしさに触れ、こどもは素直に感動し、日々成長する。こどもは、ものの美醜やことの善悪を的確に判断できる鋭い感性をもっている。こどもの感受性を生かしてこそ、次世代のより良い地域づくりが可能となる。こどもの成長や変化を目の当たりにし

て、大人は自らのこども時代を思い出し、忘れていた感覚を取り戻し、こどもと共に行動することが喜びとなる。その地道な繰り返しによってこそ、豊かな地域社会と美しい景観や環境が保持されるのではないだろうか。

現在の日本には実に様々な社会課題がある。そしてその解決方法はそう簡単には見つからない。しかし身の回りを見れば、多くのこどもたちがいる。私たちは今こそ、こどもたちの発想とアイデアそして行動力をテコにして、地域や社会を変革していくべきである。

なお、本稿では18歳までを対象とするこどもファンドを中心に考えてきた。ただ、こどもファンドの活動をしてきたこども、またこども審査員を経験したこどもは、18歳を越えてもこれまでの活動をやめるのではなく、継続したいと言っている。つまり、こども、若者、大人というそれぞれの年齢に応じて少しずつその仕組みは異なるかもしれないが、共通して主体的に地域に関わり、シティズンシップを獲得していくことができるような大きな枠組みこそが今求められている。